

領域：(8) 各都道府県組織研修会の実践（派遣前研修、指導者養成研修等）

「新潟県国際理解教育研究会の特色ある研修～スタディツアーの実践」

佐藤 義朗（新潟県国際理解教育研究会 会長）

1 概要と実態

平成29年度に文部科学省は、在外教育施設の機能強化を図り、教員派遣の「派遣前」「派遣中」そして「帰国後」の魅力高め、戦略的にグローバル教員を育成する「トビタテ！教員プロジェクト～在外教育施設を活用した戦略的なグローバル教員の育成～」を始動した。新潟県国際理解教育研究会では、帰国子女同様、「派遣教員は、グローバル人材育成のための金の卵」と捉え、派遣教員が帰国後も、本会との絆を大切にし、海外での勤務や生活の貴重な経験から育成された国際理解教育のセンスを保ち続けることができるように、会長、副会長のリーダーシップのもと、組織（事務局、会計監査、研究部、国際交流部、広報・情報部、支援部、顧問）マネジメントを行いながら、新潟県独自の研修を進めている。

2 実践

(1) 「派遣前」の取組 【「出会い」と「絆」】

- ・5月 県教委、新潟市教委と連携し、各教委が受験者の所属校の校長に連絡をとり、受験者に本会の活動を紹介します。連絡してきた受験者に、選考検査に関する情報を提供する。（支援部主催）
- ・6月～7月 県・市・文科省の受験前の研修。各受験者に支援部員1名が支援者として付くと共に、支援部を中心に面接演習を行う。（支援部主催）
- ・12月～1月 派遣先決定後の「不安解消セミナー」開催。各派遣者の当該在外教育施設に派遣経験がある教員を充て支援を行う。（支援部主催）

(2) 「派遣中」の取組 【「絆」】

- ・8月 「スタディツアー」（国際交流部主催）
- ・通年 派遣教員の便りや国内の国際理解教育の実践等をHP掲載し広く紹介（広報・情報部主催）

(3) 「派遣後」の取組 【「絆」】

- ・3月 「帰任者・派遣者と語る会」「歓迎迎会」（研究部、国際交流部、支援部主催）
- ・9月 秋の定例研修会（帰国報告会、国内での国際理解教育の実践報告、「スタディツアー」の報告）（研究部主催）

ここでは、特に本会の特色ある研修「スタディツアー」について紹介する。「スタディツアー」は、本県からの派遣された教員の在外教育施設を訪問し、当該教員を激励するとともに、各学校がおかれている現状と課題について学ぶことを目的に年1回夏季休業中に実施している。

以下の記録は、2回目から毎回参加している国際交流部の桑原洋文教諭（2007年アジア人学校協議会）提供。

① 平成27(2015)年度 ・日程 8/8～8/11 参加者3名

- ・訪問校 ソウル日本人学校（教諭）

北京日本人学校（教諭）

◎以下※は、訪問時の話題に関する事項等

※「帰国教員が日本人学校や世界への視野を持ち続けること。在外教育施設に興味がある人に現状を理解した上で受験してもらいたい」という目的で、高口和治会長の提案で1回目がスタートする。

② 平成28(2016)年度 ・日程 8/10～8/17 参加者3名

- ・訪問校 クアラルンプール日本人学校（教諭）

シンガポール日本人学校クレメンティ校（教諭：シニア派遣）

上海日本人学校虹橋校（教諭：シニア派遣）

※出入りの激しい現地採用英語スタッフとの連携（クアラルンプール）シニア派遣としての苦勞（生活環境への適応、過酷な勤務、シニアとして求められていること等） 教育施設設備の充実（3校共通）

③ 平成29(2017)年度 ・日程 8/9～8/19 参加者4名

- ・訪問校 コロンボ日本人学校（校長：シニア派遣）

ニューデリー日本人学校（教頭）

※2人とも管理職としての派遣。日本人学校独特の学校経営の苦勞（予算、派遣教員の研修、児童生徒数の確保、日本語指導の必要性等）

④ 平成30(2018)年度 ・日程 8/11～8/21 参加者4名

- ・訪問校 フランクフルト日本人国際学校（教諭）
- ミラノ日本人学校（教諭、教諭：シニア派遣）
- ブカレスト日本人学校（校長：シニア派遣）

※校内研修「ヨーロッパ中央銀行訪問」に同行する。（フランクフルト）

校門の造り・校地を見渡せる低い外壁・守衛不在の学校⇒治安の良さを実感（3校共通）。業務の精選（フランクフルト） 特別支援教育の充実（ミラノ） 危機管理（ブカレスト）

⑤ 令和元(2019)年度 ・日程 8/7～8/17 参加者5名

- ・訪問校 上海日本人学校浦東校（教諭3名）

バンコク日本人学校（教諭）

ペナン日本人学校（教諭）

ジョホール日本人学校（教頭：シニア派遣）

シンガポール日本人学校クレメンティ校（教諭：シニア派遣）

※大規模校での学習指導や、バス通学（バス185台）、登下校システムの工夫。職員専用の出勤退勤用スクールバス、東京学芸大との連携、教育実習生受入れ（バンコク）

スタディツアー参加者と現地採用スタッフの感動の再会（クレメンティ）

日本語習得に関わる現地児童の入学に関する課題（ペナン）

3 成果と課題

【成果】

- ・派遣教員は、日本を離れ異国の地で長期間生活する中で自身の初心を見失いがちになりつつある。同郷の教員の訪問は、同志のつながりを意識させると共に、初心を思い出させる良い機会となり、派遣された意義や使命を改めて実感させる良い機会となった。
- ・スタディツアー参加者にとっても、以前自分が在外教育施設で勤務し、国際理解教育を推進していた時のことを思い出させ、自分の使命について改めて考える機会となった。

【課題】

- ・日本人学校既派遣者の参加が多数を占めている。スタート時の平成27(2015)年度の目的のように、派遣希望や検討中の教員の積極的な参加（途中参加、途中離脱歓迎）も促したい。実際に見て、話を聞き、派遣教員（勤務、生活等）の光と影の両面を理解することで、派遣へのビジョンや覚悟、派遣教員としてどんな資質や能力を身につけるべきかが明確になると考える。
- ・本会の研修受講生や「スタディツアー」の被訪問者が、帰国後積極的に本会とつながり、教育現場で国際理解教育を推進しているとは必ずしも断言できない。今後も「出会い」と「絆」そして「継続」を大切にしなが「派遣教員は、グローバル人材育成のための金の卵」を合言葉に「グローバル教員」育成の有効な支援について模索していく必要がある。
- ・令和2(2020)年度は、新型コロナウイルス感染拡大予防のため中止となる。

○スタディツアーの様子

